

第3部会

マルティン・ブーバーと神経験

大川 武雄

初めに、ブーバーの経験概念が明確にされなければならない。経験の認識とその意味判断について一つの結論を下したのはカントである。フッサールによれば、ドイツの超越論的哲学の発展系列を規定したのはカントであり (E. Husserl, *Krisis*, 55)、カントはヒュームに独断のまどろみから覚醒されて、当時、当然とされていた合理主義に対しては、ヒュームの感性が客観性の不可欠の契機であり、純粹合理性だけでは空虚に陥ると認め、経験主義に対しては、感性的与件が或る仕方です、すでにアプリアリな形式によって取り纏められ、論理化されている限りにおいて、感性を通じて認識された世界にも、客観的妥当性と必然性を認めることが出来るとした (ibid., 57)。フッサールはカントの認識論が自然主義的であるとして、これを拒否し、純粹現象学の認識論を説くが、ブーバーの経験認識はカントに倣うものである。カントが経験の可能性の条件とした、感性の形式としての純粹直観と因果のカテゴリー等の純粹悟性概念はブーバーの経験認識の底に一貫して流れている意識であったことは、彼の「啓示」理解によって知ることができる。ブーバーは「啓示は、その最も大胆な像において秘密だけを指し示す。人はその秘密の現実性と不可解性 (Unfaßbarkeit) を同時に彼の個人的人生経験によって知る」 (M. Buber, *Briefe* 2, 319) と述べている。人は経験を宗教的瞑想のみによって理解

し、評価することは許されない。ブーバーは自己の思想を体系的に展開することをしなかった。そのためか、彼の論述には、矛盾や不明確な点があることは、多くの学者 (G. Scholem, *Judaica* 1, 133ff)・研究者によって指摘されてきた。これは経験概念にも言える。経験概念は一九二三年の主著「われとなんじ」とその後では、意味が逆転するのである。「経験とは根元語・われ―それに属し、経験とはなんじからの遠ざかりである」 (*Ich und Du*, Werke 1, 83) とされたものが、一九二五年の『教育的なるものについての講演』では逆に経験は根元語われ―なんじに属するとされる (M. Buber, *Über das Erzieherische*, Werke 1, 788ff)。この箇所だけを見れば、明らかに矛盾であるが、しかし実際はブーバーがその時まで、この二つの意味を巧みに使い分けていたと解釈するのが妥当であろう。ただしブーバーがこの講演を契機に経験概念を根元語われ―なんじの関係で用いる途を、準備したと見る (R. Moser, *Gottes-erfahrung bei Martin Buber*, 80) ことはできるのであって、事実ブーバーは以後、神経験を根元語われ―なんじとの関係に結び付け、それを晩年の『ある哲学的釈明から』 (*Aus einer philosophischen Rechenschaft*, Werke 1, 1111 Anm. 1) で自ら確認している。ブーバーの神経験は神と人間との間の対話の中で生起する。この場合の人間の行為は自由な行為であるが、しかしそれは向き合うものの恩恵によって担われている。ブーバーは神経験における神の優位性 (Priorität) をあくまでも維持する。人は神経験を自分のために要求してはならない。それは神経験の神秘的なるもの (Geheim) を傷つけてしまうか

らである。神経験は長い歴史を持ち、ユダヤ教のごとき歴史的宗教の歴史を形成してきた。その歴史をみると、われわれは、神経験が「神経験をあらゆる側面から侵略しようとかかる、形而上学、グノーシス、呪術、政治などの非宗教的要素との闘争を繰り広げてきた事に気づく (M. Buber, *Gottesfurchen*, 528)。その戦いとは、人間と神的なるものとの間の減価不能な (unentwertbar) 出合いの場である、生きられる具体的現実を守り抜くための戦いであり、「われわれの運命とわれわれの行為との間に、あるいはわれわれの呼びかけとかなたからの応答との間に、神秘的な対話のなされる瞬間」(ibid.) を護ることである。この戦いは人間が神から付託された、人と現実との生きた統一を實現し、われと永遠のなんじとの関係を成就することである。これはユングの言う如き、実体のない現象学的心理現象では決してない。

ポエジーと哲学

——ドイツ初期ロマン主義の聖なるものへの関連——

田 口 博 子

十八世紀末のイエーナで生じたドイツ初期ロマン主義運動は、啓蒙主義に代表される権威への反撥と同時にその継承という複雑な面を呈する。理性は全面的に否定されるわけではない。しかしその活動は俎上に載せられ、理性の衣鉢を継ぐ哲学

にポエジーが対置される。今回の発表ではノヴァーリスとシュレーゲル弟、そしてやや立場が異なるシュライアマハーにおいて、ポエジーと哲学が如何に無限なるものと関連しているかを考察する。

「来るべき哲学のための断章」は、ポスト・フィヒテ世代の共通意識である、従来の哲学のありかたに対する異議申し立てである。「ロゴロジー (Logologie)」はノヴァーリスによる造語で、「ロゴスの累乗」を意味し、そこには「メタ」の意識が色濃くあらわれている。

来るべき哲学は「哲学の哲学」だが、「……常に何かしら個人の哲学の「要素」を有しているであらう」。哲学の理想は偶然的なものを減じることだが、メタ哲学の叙述では非哲学な個人的・偶然的なものが混ざることやぶさかでないという感じである。また「哲学という営為は……自己と会話すること」で、本来の意味で自己が開示されることである。そして、哲学するという決意は「奴隷を解放する行為。つまり、「自己へと向かうのを後押しする衝撃」と把握される。

だが哲学は個人の営為にとどまらない。ところが伝達に使用される言語は、不十分な媒体である。それを補うのが師匠で、「真の教師とは、道標である」。「真の共同哲学とは……求められている世界へと共同で移動することにある」。真理への飛行の際、先達は交替するという。哲学という営為を真剣に行う気構えさえあれば、指導者には誰でもなれるというところに、ユートピアへの志向を読み取ることができるのではないか。

プロテスタンティズムが興隆するにつれ、聖なる感覚のみな